

近松世話悲劇における

脇役設定の意義

二十九回生 坂澤ひとみ

目次

序

第一章 悲劇の環境と動因

1. 主役の役柄からみた位置付け

2. 主役の身分・境遇

3. 悲劇の環境と動因

第二章 悲劇を進展させる脇役達

第一節 脇役の種類

第二節 脇役設定の意義

序

近松が時代物を経て世話物に手を染めたのは、元禄十六(一七〇三)年近松五十一歳の「曾根崎心中」がそのはじめである。従来の武家社会の御家騒動のものから、それまで脚光を浴びなかつた庶民へと視点が展開されていった。商業資本の勃興期の非人間性の中に在った人々に時代の重圧がしわよせされて、文字通り愛欲と呼ぶに相応しい恋愛が生身の人間の真実に迫る。赤裸々に生きる庶民の体臭を

人形の動きをかり、三味線の音色、語り手の三者が一体となって、近松の哀切極らない筆致で描き出された世界を演出していくところに高次の文学性を見出し得る。そこで、近松世話悲劇二十四篇を取りあげてその世界に触れたいと思う。作品の多くは心中に終わる悲劇で、ここでは悲劇の展開を関連している脇役に注目して、その動因にどのように関わっているか、その関りのし方から、いくつかの型に分類し、どのような設定の意義があるのかを追求したい。近松は多くの場合悲劇に至らしめる敵役を設定し、単なる憎まれ役から、意図的な悪漢然とした者とその程度も異なっているが、そういった敵役の他、その行為者自身善意から出た行為が結果的に主役を悲劇に陥れている役柄も考察したい。

第一章 悲劇の環境と動因

既に身分や境遇で抗うことのできない、状態を準備し、封建社会の主従関係からくる人間関係と家族関係からくる

それは、縦横に交差して主役達の身動き出来ない環境がつくられていくわけである。表1の悲劇の環境で主従関係による圧迫があるものを「A」とし、表2の家庭の束縛や親子の断絶等の親子関係による圧迫があるものを「B」として分類した。次に悲劇の動因を、恋愛の障害「a」、不倫の行為「b」、金銭の破綻「c」、犯罪「d」として分類した。歌舞伎的脚色物等の二、三の例を除いて世話物の殆どが、主従関係や親子関係のなかに悲劇へ発展させる要素を内包していると言える。とりわけ、親子関係に於いての人間関係に悲劇への下地がある例が顕著である。それら悲劇の環境と動因を分析してみたい。

A、主従関係

封建制度下に於ける主従関係には、絶対的なものがあり、秩序・常識を守る側の主人が、例えば、若者の封建秩序さえも揺るがす恋愛を認められないのは当然ではあるが、この関係で多くは、恋愛の障害者として行為し、主の権力は強力であったので主と手代、主と弟子の間での内面的対立は避けられないものとなる。また、商業資本の中に在る主と従が利害関係で結ばれているので金銭の破綻に関わる場合もある。よって主従関係のなかに次第に対立を避けられないものとする素地があり、恋愛の障害、金銭の破綻、更に倍加すれば犯罪といった悲劇への動因があると言える。作品では二十四篇のうち五例があげられる。(表1)

B、親子関係

親子関係は、大きく実の親子の場合と、義理の親子の関

係に分けられる。義理の親子の関係では、どちらか一方に義理の関係を含んでいるものも合わせて、ア、継父母系、イ、養父母系、ウ、舅姑系に分ける。表2のとおりである。

以上のように、主役達は身分的にも、極めて低いと言わねばならないし、表に示しているのとおり、家庭環境・成長過程といった境遇的なものからも同様のことが言えると思う。片親の者が最も多く、順に継父・継母に育てられた者、養父母に育てられた者となっていることから明らかである。人間の行為が環境に左右されるとするならば、主に彼らを取りまく人間関係は見過ごすことの出来ないもののひとつであり、主役と、継父母、養父母等といった関係が重要な問題を含み、悲劇への移行に何らかの関りがあると思えば、彼らこそ、悲劇を進展させる脇役たり得るのである。ともかく、成長過程、家庭環境といった境遇的なものは如何ともし難く、主役の人との関りに於いて、何か事が起こると、そういった弱い所から、崩れる危険を孕んでいることは確かである。このように、近松は、世話悲劇の主役達を描き、その身分に抗うことのできない状態を準備し、彼らの成長過程に潜在的に暗さを備え、環境にはけ口の無い状況を与え、とりわけ、彼らをとりにまく人間関係のなかに、悲劇を進展させる脇役達を配置し、悲劇へ向わざるを得ない要素を随所に用意するのである。

(表1) 主従関係

	作品	主	従(主役)	悲劇の環境	悲劇の動因	分類
①	會根崎心中	醬油屋 平野屋 久右衛門	手代 徳兵衛	<ul style="list-style-type: none"> 叔父でもあり主でもあるといった二重の重圧がある。 女房の姪とめあわせようとする主の善意が初に誠意を尽す徳兵衛と対立を避けられないものとする。(利害の対立) 	<ul style="list-style-type: none"> 徳兵衛に初と手を切らせ、女房の姪とめあわせようとする。 	a
②	五十年忌 歌念仏	但馬屋 九左衛門	手代 清十郎	<ul style="list-style-type: none"> 勘十郎・源十郎による奸計から嫁入道具のさし押えを父と謀んだ疑いを持つ。(利害の優先) 勘十郎の出す証文を信じてしま 	<ul style="list-style-type: none"> 道具さし押えの罪と七十両横領の罪により、清十郎を身ぐるみはいで布子一枚で追い出す。 	c
③	心中刃付 氷の朔日	石見屋 利右衛門	手代職人 平兵衛	<ul style="list-style-type: none"> 面目を保つことを第一とする。 あくまでも自分の信念を貫こうとする職人気質から平兵衛の遊女身請のための金の工面のし方が気にいらぬ。 	<ul style="list-style-type: none"> 雪駄の注文を無理に断わらせ遊女小かんとの仲をさこうとする。 	c
④	今宮心中	菱屋 (四郎右衛門) 貞法	二郎兵衛	<ul style="list-style-type: none"> 貞法の説く言葉のなかに子飼いの使用人への恩情が感じられた二郎兵衛であったが、どうしてもきさがあきらめられない。 	<ul style="list-style-type: none"> きさの縁談を貞法がひきうけたことがきっかけで、二郎兵衛は菱屋の大切な証文を破ることになる。 	d
⑤	大経師昔暦	大経師屋 以春	茂兵衛	<ul style="list-style-type: none"> 以春の玉への情気から茂兵衛追放のはこびとなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 以春が玉のところへ夜な夜な通っていたため、さんのいたづら心をおこさせ茂兵衛との不義へと発展させる。 	b

a...恋愛の障害

b...不倫の行爲

c...金銭の破綻

d...犯罪

(表2) 久実の親子の關係

	作品	親	子(主役)	悲劇の環境	悲劇の動因	分類
⑩ 博多小女郎 波枕	惣左衛門	惣七		<ul style="list-style-type: none"> ・実父母でありながら、深い愛情の流出する場面はみられず、父親の権力にものを言わせて私欲のため縁談を無理強いさせるといった情の薄い親の姿をみるこ とができる。 ・世間体を重んじる親。 ・武士であり、親をみこまれて縁付いた先なので、婿に内証で娘に借金を申し込むといった速慮がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・久米之介との結婚を望む梅に父は金持ちの作右衛門とめあわせようとする。 ・許婚の親への面目もあって不承知な嘉平次に結婚を勧める。 	a
⑨ 山崎 与次兵衛 寿の門松	浄閑	山崎 与次兵衛		<ul style="list-style-type: none"> ・金持ちで、商人道をひたすら歩んできた父親であったが卒の命にはかえられぬと大事の金を手放す。↓解決 	<ul style="list-style-type: none"> ・婿に内証で借金を申し込んだことが、茂兵衛さんの不義を招く。 	b
⑧ 大経師昔暦	道順夫婦	さん				a
⑦ 生玉心中	五兵衛	嘉平次				a
⑥ 心中万年草	与次右衛門 夫婦	梅				a
c						

▲義理の関係I-A▼

	作品	親	子(主役)	悲劇の環境	悲劇の動因	分類
⑪	薩摩歌	継母	まん	・継子いじめ。これらの親達は、等しく強欲で子を苦しめる。親孝行を強制し、子に全く愛情を示さない継父母として描かれる。	・娘のいやがる縁談を無理強いして源五兵衛との仲をみとめない。	a
⑫	卯月の紅葉	ゐ(妾) ま	亀	・旧主への義理があるから与兵衛に対して遠慮した態度をとり、それが身の仇となる。	・身代乗っ取りを企て婿の与兵衛との仲を破こうとする。	(a) c
⑬	長町女腹切	九兵衛	花	・半七との仲を破いて勤めの年増しを強要する。	・継父の与兵衛に対する身の遇し方と実母の不自然な愛し方が油屋の女房殺しへと招く。	a
⑭	女殺油地獄	徳兵衛	与兵衛	・養子への義理はあっても愛情に乏しい養父。名譽を傷つけられて勘当するといったところにその関係の脆さが隠れていた。	・構中の金が無くなったのを理由もきかず市郎右衛門のしわざとし、養子であることを証して追放してしまふ。	d

▲義理の関係I-V▼

	⑮	⑯				
	心中一枚 絵草子	介右衛門	市郎 右衛門	・実父はあるが飛脚屋へ跡取りとして養子に入ってきた忠兵衛であったので養母養子間に遠慮がある。	・店の金が届かないのを気にしており、八右衛門と与兵衛の偽芝居からひそは封印切まで招く。	c
	冥途の飛脚	妙閑	忠兵衛	・養子への義理はあっても愛情に乏しい養父。名譽を傷つけられて勘当するといったところにその関係の脆さが隠れていた。	・構中の金が無くなったのを理由もきかず市郎右衛門のしわざとし、養子であることを証して追放してしまふ。	c

⑰	心中宵庚申 伊左衛門 夫婦	半兵衛	・二十二のときに養子に入った家なので遠慮があり、一方養母は店を譲る恩をかさにきて丁稚並みに半兵衛を扱う。	・仲のよい夫婦を姑去りさせて破いてしまう。	a
---	---------------------	-----	--	-----------------------	---

△義理の関係↑ウ▽

⑱	心中重井筒 宗 徳 徳兵衛	心中天の 網島 五兵衛 治兵衛	・舅は二度目の入婿の徳兵衛が気に入らずあれこれとことを言われている。 ・独立して紙屋を営んでいる治兵衛であつたが遊女小春と情を通じているため兄から再三注意され舅はがまんしかねて娘さんをつれていくと引きつれていく。	・徳兵衛がたよりないので、あれこれと店の事に口出して借金した徳兵衛に返済せよと出むいてくる。 ・治兵衛の遊女屋通いからついには娘を連れていくので離縁状を出せとせまる。そのため小春身請けのための工面が出来ず。	c
---	------------------------	--------------------------	---	--	---

※〔悲劇を進展させる脇役となっているもの〕

○	①	○	②	○	③	○	④	○	⑤	○	⑥	○	⑦	○	⑧	×	⑨	○	⑩	○	⑪	○	⑫	○	⑬	○	⑭	○	⑮	○	⑯	○	⑰	○	⑱
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

（付記）⑨「山崎与次兵衛寿の門松」は歌舞伎の脚色物で決末も解決になっているため実父浄閑は悲劇を進行させる脇役となっていない。

第二章 悲劇を進展させる脇役達

第一章で考察したように、主役をとりまく環境では、主従関係と親子の關係のなかに悲劇へ進展させる下地があり、主役を遮るものとして、恋愛や金銭の破綻があり、更に、不倫の行為や、犯罪によって窮地へ追い込まれていくことがわかった。

主従関係、親子関係で、主役と縦横に絡み合せて、悲劇を免れないものにしていく脇役達を取り上げ、この章ではどのように悲劇と関っていったかを追究したい。

脇役の役柄としては、老役と敵役が殆どで例外的に、立役、娘形、女房形が二例ずつ、立女形、二枚目、子役が一例ずつである。ここでは、老役と敵役について述べる。

イ、老役

老人役のことである。老役は多くの場合、悲劇の進展に關っていることがわかる。「堀川波鼓」「淀鯉出世滝徳」「丹波与作待夜の小屋節」「夕霧阿波鳴渡」「鏝の権三重惟子」「山崎与次兵衛寿の門松」の六作品を除く他の十八篇に老役が関与し、第一章 悲劇の環境と動因の主従関係と親子関係で述べた脇役の殆どが、この老役であったとも言えよう。

ロ、敵役

敵役は『役者大全』によると、早くは悪人形と言ってい

たらしく「悪人形というて敵役とは言はず。元禄二年、都役者巳年鑑には悪人形どのせたり。元禄の中頃より誤りて敵役とし」たとの由来が記されている。その発生については、立役のシテに対する相手方のワキとして配された地位で、初期演劇の最も一般的な形式の善対悪との対立に於ける悪人形を引き受けていたらしい。腹黒い計画的な悪の遂行者といったものから、一見善人にみえるが心の底に悪巧みを持った者等がある。作品では「薩摩歌」「心中重井筒」「心中刃は氷の朔日」「夕霧阿波鳴渡」「長町女腹切」「女殺油地獄」「心中宵庚申」の七例を除く作品に敵役が登場し、その凡てが悲劇の動因に關り悲劇を進行させている。いわば敵役は悲劇進行の積極的役割を果たしていると言えそうである。更にそれが善悪の対立抗争による劇的場面の設定と言うような単純な目的ではなく、悲劇形成上の特別な意義を担っていることに留意したい。

次に敵役の意義について述べる。高野正巳氏の「近松の悲劇に於ける敵役の意義」によると、心中物に於ける敵役の意義は、

敵役は主人公の中に潜む魔性の人格化せられたものであって、彼こそ主人公の罪過を一身に引き受けて観客の悪罵を浴びるもの

であり、さらに犯罪物になると一層明瞭に、

敵役は、主人公に代つて十字架を負うためのものと、される。そして加えて

敵役達は作者の筆の先から生まれて来たのであって、詮す

るところ彼等は劇中の人物の中で最も非現実的な存在である。つまり、敵役なるものは悲劇作者の脚色過程に於ける技巧的所産

とあり、主役達を悲劇の主役たるに相応しい受難者とするための技巧を施す必要から設定されたものが敵役であると言える。そこで敵役を戯曲構成上から分類することが出来る。藤野氏は世話物十六篇について四つの分類をしておられるが、それをふまえて世話物二十四篇について敵役の分類を施し、敵役以外については更にABCの三つに分類して論を進めたい。(表3・4)

(一)陰謀術策をかまへ計画的に相手を破滅させる最も悪質な人物で、悲劇的結末の直接動機をつくりあげる者。

(二)深いたくらみはないが、自己の立場を有利にするため相手を窮地に陥れ、悲劇の重大な原因を形成する者。

(三)憎しみを負わせるために設けた端役級の人物で、劇としての重要性はないが敵役的な行動をとる者。

四敵役ではないが結末において同様の役割を演じ、主人公を悲惨な末路におもむかしむる者。

A封建社会の中で主としての権力行使により主役を窮地に追いやり、悲劇の進展に関りを持つ者。

B封建社会の中で親としての権力行使により主役を窮地に追いやり、悲劇の進展に関りを持つ者。

C傍系者で、その行為が結果的に悲劇的結末を導くもの。

第二節 脇役設定の意義

前節では、脇役達を悲劇との関りの度合いによって(一)(二)(三)(ABC)に分類し、次にどのようなように悲劇に関ってきた

かを例証してきた。脇役の多くは、悲劇の進展に重要な役割を担っている敵役がこれにあたり、悲劇との関りを総合すると、「a」恋愛の障害者、「b」不倫の行為に関る者、「c」金銭の破綻に関る者、「d」犯罪に関る者に分けられ表5のようになった。これを悲劇構成からみると次のようなことがわかる。第(一)類の敵役は、複次に悲劇の動因と関っており、後期の作品の「生玉心中」が「會根崎心中」の十三年忌の作品にあたり同じ趣向で書かれたという、この作品を例外として扱えば、第(一)類の悪辣な敵役は初期のみ絞れること。第(二)類、第(三)類の敵役については、山崎与次兵衛寿の門松から敵役は半道形としての滑稽味を帯びた悪役に变化している。これは前期の作品「心中万年草」あたりにも僅かにその萌芽がみられるが、著しく变化したとみなされるのは先に挙げた作品からである。後期を概観すれば、「冥途の飛脚」前後から、敵役の悲劇進展に果たすエネルギーが、前期の作品については、ほぼ第(一)類から(二)類の敵役だったのに対し、第(二)類、(三)類と変化してきており、いくつかの作品は敵役さえ設けていない作品がみられ始めた。逆に敵役という設定ではないが、敵役同様の役割りを果たす老役等の者が敵役から、敵役以外の者へ添加されたと言い得るのではないか。これは次にあげる脇役の配置からみた分類を考えてみると一層はっきりするが、敵役以外の者に、どのような立場と、どのような関係を持たせて、悲劇進展に一役買わせていった

(表3) △敵役の分類▽

(一) 陰謀術策をかまえて計画的に相手を破滅させる最も悪質な人物で、悲劇的結末の直接動機をつくりあげる者。

恋愛と金銭の障害者

㉑九平次 ㉒伝三郎 ㉓長作

(二) 深いたくらみはないが、自己の立場を有利にするため相手を窮地に陥れ、悲劇の重大な原因を形成する者。

金銭の障害者

㉔善次郎 ㉕毛刺九右衛門 ㉖八右衛門

恋愛の障害者

㉗由兵衛

(三) 憎しみを負わせるために設けた端役級の人物で劇としての重要性はないが敵役的な行動をとる者。

不倫の行為に関わる人物

㉘磯辺床右衛門 ㉙助右衛門 ㉚川側伴之丞

恋愛の障害者

㉛彦介 ㉜作右衛門 ㉝太兵衛

金銭の障害者

㉞八蔵

- ㉟：「曾根崎心中」
- ㊱：「淀廻出世滝徳」
- ㊲：「今宮心中」
- ㊳：「山崎与次兵衛寿の門松」
- ㊴：「卯月の紅葉」
- ㊵：「心中二枚絵草子」
- ㊶：「堀川波鼓」
- ㊷：「心中万年草」

- ㊸：「生玉心中」
- ㊹：「博多小女郎波枕」
- ㊺：「大経師昔暦」
- ㊻：「心中天の網島」

- ㊼：「五十年忌歌念仏」
- ㊽：「冥途の飛脚」
- ㊾：「鐘の権三重帷子」
- ㊿：「丹波与作待夜の小屋節」

(表4) ▲敵役以外の分類▼

(敵役ではないが結末において同様の役割を演じ、主人公を悲惨な末路におもむかしむる者)

A

封建社会の中で主としての権力行使により主役を窮地に追いやり、悲劇の進展に関わりを持つ者。

- ㊦ 久右衛門
- ㊧ 九左衛門
- ㊨ 利右衛門
- ㊩ (四郎右衛門)・貞法
- ㊪ 以春

B

封建社会の中で親としての権力行使により主役を窮地に追いやり、悲劇の進展に関わりを持つ者。

- ㊫ 与次右衛門夫婦
- ㊬ 五兵衛
- ㊭ (道順夫婦)
- ㊮ 惣左衛門
- ㊯ 新兵衛・亀の継母
- ㊰ 長兵衛とその妾るま
- ㊱ 長花の継父九兵衛
- ㊲ 継父徳兵衛・さは与兵衛
- ㊳ 養父介右衛門
- ㊴ 養母妙順
- ㊵ 養父母伊左衛門夫婦
- ㊶ 宗徳
- ㊷ 五左衛門

C

傍系者で、その行為が結果的に悲劇的結末を導くもの。

- ㊸ 宮地源右衛門
- ㊹ 難与平
- ㊺ (半七叔母)
- ㊻ 辰
- ㊼ さん
- ㊽ きは
- ㊾ 雪

(表5)《悲劇を進展させる脇役達》

	a. 恋愛の障害者	b. 不倫の行為に関わる者	c. 金銭の破綻に関わる者	d. 犯罪に關する者
曾根崎心中	久右衛門(1) 九平次		九平次(1)	九平次(1)
薩摩歌	新兵衛・ まんの継母			
心中二枚絵草子			介右衛門	善次郎(2)
卯月の紅葉	伝三郎(1)		長兵衛・るま	伝三郎(1)
堀川波鼓		磯辺庄右衛門 宮地源右衛門		
五十年忌歌念仏			九右衛門 勘十郎・源十郎(1)	勘十郎・ 源十郎(1)
卯月の潤色				
心中重井筒	宗徳・辰			
心中万年草	与次右衛門 作右衛門(3)			
丹波与作待夜の小屋節			八蔵(3)	三吉
淀鯉出世滝徳			(惣兵衛)	
心中刃は氷の朔日	小かん叔母		利右衛門	
冥途の飛脚			八右衛門(3)	妙閑 (八右衛門)
今宮心中	由兵衛(2)			(四郎右衛門) 貞法
夕霧阿波鳴渡				
長町女腹切	九兵衛		九兵衛・ 半七の伯母	
大経師昔暦		以助右衛門(2) 春	(道順夫婦)	
生玉心中	五兵衛・きは 長作(1)		長作(1)	長作(1)
鏝の権三重惟子	雪	川側伴之丞		
山崎与次兵衛寿の門松	彦介(3)			(難与平)
博多小女郎波枕			惣左衛門	九右衛門(2)
心中天の網島	太兵衛(3)さん		五左衛門	
女殺油地獄				徳兵衛・さは
心中宵庚申	伊左衛門夫婦			

かをまとめてみたい。

主役との関りを合わせ見ると更にはつきりするようになり、悲劇を進展させる脇役達は、主役と密接な繋がりのある親兄弟、伯父伯母の血縁者や、主役の主人達、そして悲劇を積極的に進行させるために設けられた敵役達であった。表6に於いて脇役の配置からみると次の三系統に分類できる。

⑥は全体の約半数の作品が属しており、敵役は設定されているが、悲劇進展に主役の縁者——実父母、継父母、養父母、舅姑等が関っており、細かく分析すると、十例中、親子関係のうち義理の親子関係が五例となっている。そこで悲劇を進展させる脇役の設定においては敵役と主役の縁者という配置が最も多いと言いうことが出来る。更にこの場合、主役の縁者には多く義理の関係を持たせてあり、これは、義理からくる身動きの出来ない状況というものを主役に課するためであると考えられ、主役の周りにいる縁者達の中に、義理からくる様々な問題を含ませることが悲劇進展に有効に働くものと言えるのではないか。このことは、④を分析すると一層はつきりする。④は⑥の次に多く六作品を数える。これは敵役が設定されていないもので、六作品凡てが義理のある関係となっており、その関係に何らかの問題を含んでいる。例えば、「薩摩歌」「長町女腹切」「女殺油地獄」は主役と継父母といった関係に、「心中重井筒」は主役と舅、「心中宵庚申」は主役と養父母、「心中刃は氷の朔日」は主役とその育ててもらった叔母といった関係に義理の問題を有しているのである。よって先に述

べたように、悲劇進展の脇役に主役の縁者を配した理由は、主役の一番身近なところに縁者との複雑な環境を設け、そこから自己の内的要求と周りの要求とによって葛藤が起り必然的に窮地へ落とし入れるためであったと言える。⑦については、敵役と第三者で悲劇が構成されるが、六例中「今宮心中」「五十年忌歌念仏」は、敵役と主役の主人で悲劇が進行され、これも先の血縁者程ではないが、主役の身近なところにいる脇役と取ってさしつかえないと思う。悲劇と関る脇役が設定されていない「夕霧阿波鳴渡」も合わせて、「淀鯉出世灌徳」「山崎与次兵衛寿の門松」と、「堀川波鼓」「鍵の権三重帷子」が脇役設定の面から比較的軽い扱いを受けているのは、前者がやつしを取り入れた歌舞伎的脚色物であり、後者が女敵討ちを主体とした姦通物であるためだと思われる。よってこれらの作品が悲劇の初期的作劇法の悪役としての敵役と、それを後押しするような端役程度の者が設けられているのはそのためだと考えられる。

以上のことを総合的に見ると、近松の世話物の初期作品に於いては、最も悪質な敵役に掘られた落とし穴によって、主役達を逃げ道のない絶望的な窮地へ落とし、自滅を余儀なくされるといふ傾向が著しく、ここでの脇役は、主役の主人・親といった密接な繋がりのある者以上に敵役が積極的に悲劇を進行させる任にあたった。「五十年忌歌念仏」までは、こういった善と悪の対立が、主役を悲劇の主役たらしめたと言ひ得るが、「心中重井筒」以降は、善玉・悪

(表6) △脇役の配置からみた分類▽

<p>④ 敵役の役柄が設定されていないもの。</p>	<p>「薩摩歌」 「心中重井筒」 「心中刃は水の朔日」 「長町女腹切」 「女殺油地獄」 「心中宵庚申」</p>
<p>⑤ 敵役と主役の縁者によって悲劇が進行するもの。</p>	<p>「心中万年草」 「博多小女郎波枕」 「生玉心中」 「大経師昔暦」 「丹波与作待夜の小室節」 「心中二枚絵草子」 「卯月の紅葉」 「冥途の飛脚」 「心中天の網島」 「曾根崎心中」</p>
<p>⑥ 敵役と第三者で悲劇が進行するもの。</p>	<p>「五十年忌歌念仏」 「今宮心中」 「堀川波鼓」 「鍵の権三重帷子」 「淀鯉出世滝徳」 「山崎与次兵衛寿の門松」</p>
<p>⑦ 悲劇と関わる脇役が設定されていないもの。</p>	<p>「夕霧阿波鳴渡」</p>

玉の単純な争いではなく、悲劇が主人・親等主役に連なる多くの脇役との密接な繋がりの下に展開されて余すところがない。ここにおいて近松世話悲劇における脇役設定の奥行を深めたと言える。これは、また別の面から言えば、悲劇の推進力が善意者側にも集結することを示し、悲劇の展開で真に恐ろしい悪は、敵役として作劇上の必要から便宜上設定されているそれよりも、主役の縁者達の心の中に秘められているそれである。主役の陥らざるを得なかった悲劇的狀況は、実は彼らの日常生活の一番身近にあった主従関係の縦糸と、親子関係の横糸によって作り出された人間関係の網の目の中に胆胆し、恋愛や金銭の問題、そして色と欲から起こる犯罪等を契機として顕在化してくるものにも他ならないのである。そこで、ここでの脇役は、主人・親等の絶対的権力行使と、義理を有する関係による、もはや動きの取れないまでに追い詰められた状況が、封建社会の制度そのものが孕んでいる矛盾までも露呈しているため、悲劇の深刻化と、心中に代表される死の必然性の増加といった意義を見い出すことができる。悲劇は、主役の縁者によって進行するということが、脇役の設定を通して明らかとなった。このように近松が、主役の身近な者との繋がりに視点を据えたということは、脇役設定の奥行を深めたと言わねばならない。

結び

近松世話悲劇の主役達は、身分的にも極めて低く、境遇

的にも片親であったり、さもなくば継父母、養父母といった義理を有する関係にであったりと言った手かせ足かせがあった。そういった環境——主に彼らを取りまく人間環境に左右されて悲劇が進展する。そういった悲劇を進行させる脇役は、多くの場合作劇上の必要から設定された敵役と、主人・親等の老役であった。脇役の悲劇への介入の度合によって(一)(二)(三)と分類し、(一)は敵役を当て、(二)は敵役以外の者をあててABCの三つに分けてみた。第(一)類に属する敵役は「五十年忌歌念仏」までの初期作品にあらわれ、以後は、敵役の設けられていない作品や、敵役の性格が滑稽味を帯びた引立役としての一面を有し、敵役の悲劇推進のエネルギーが弱まっていることがわかった。これらをまとめて脇役の配置からみると(四)敵役の役柄が設定されていないもの。(五)敵役と主役の縁者によって悲劇が進行するもの。(六)敵役と第三者で悲劇が進行するもの。以上の三系統に分類が可能で、なかでも(六)が最も多く、加えて(四)を考慮合わせると、初期作品が第(一)類の悪辣な敵役による悲劇の進行が顕著であったのに対し、以降は、敵役以外の例えば主役の主人・親といった老役等が、敵役の担ってきた悲劇の進展を担い、さらに分析すると、主役の縁者によって悲劇が倍加されていることがわかった。そこで、ここでの脇役は主役に代って憎しみを背負う、或は悲劇の主役たるに相応しい受難者とするため作劇上の必要から設定されたものとしての敵役に止まらず、主役の主人・親等の絶対的権力行使と、義理を有する関係によって追い詰められていく

状況が、封建制度そのものが孕んでいる矛盾までも露呈しているため、悲劇の深刻化と、心中に代表される死の必然性の増加といった意義を見出すことができる。ここにおいて脇役設定の奥行は深まったのである。

以上のように近松世話悲劇における脇役設定を詳細に考察してきたが、悲劇が、主人・親等・主役に連なる多くの脇役達とのいかに密接な繋がりの下に存在しているものであるかと言うことが、様々な脇役設定を通して明らかとなった。主役の縁者を基盤に結び合わされた家族の繋がりにもかかわらず、息苦しく張りめぐされた人間関係の諸相を呈しており、しだいに追い詰められていく様が、悲劇へと展開されていく。そういった世話悲劇の主役達は、人と人との繋がりの中で織りなされた極枯の闇の中で、恋愛の障害や、金銭の破綻、不倫の行為や犯罪を清算し、死んで浄化しよるとする。主従関係を縦糸とし、親子関係を横糸として織りなされる穢土は、身を落とさねばならぬ修羅の世界で、底に身を落していった者達の血で染めあげられてきた。そういった者達は、周りの者から受けた傷が化膿するまでに拡大して自ら滅びて浄化する外はないのである。これは単なる善が悪によって滅ぼされるといった悲劇ではない。善悪で片づけることのできないものである。近松の晩年の作品には敵役が設定されず、老役が悲劇に一枚買っている。これは、人間描写の深刻化なのかもしれない。善意からの行為であっても逆に主役を悲劇に落としめる例も少なくない。近松の眼には、人間の生の現実が悪を内在させて生きるこ

ととして映っていたのではなかったか。善と悪と境界線を引きくことを控え「女殺油地獄」「心中宵庚申」といった敵役が設けられておらず主役の縁者によって悲劇が進展するといった作品を世に送り、善・悪の定かでない、或は、善・悪を越えたところを近松は見つめていたのではないか。近松の世話悲劇における脇役設定の深まりが、そういった視点を反映しているように思う。